

漢文  
12

高橋和巳研究

編者略歴 小川和佑（おがわかずすけ）

昭和五年東京生れ。明治大学文芸科卒・日本近代文学専攻。現在、昭和女子大学助教授。

日本近代文学会・日本文学風土学会・解釈学会会員

主著に『立原道造研究』（審美社）『三好達治研究』（国文社）『四季』とその詩人（有精堂）  
『三島由紀夫少年詩』（潮出版社）『現代詩・土着と原質』（教育出版センター）『戦後詩大系』  
全四巻編著（三一書房）『日本抒情詩集』全四巻編著（潮出版社）『中原中也研究』編著（教育出版センター）他。

以文  
選書 12 高橋和巳研究

昭和五十一年七月十日初版発行

編者 小川和佑◎

発行者 柴崎芳夫

発行所 教育出版センター 東京都豊島区北大塚三一二九一二

電話（〇三）九一七一八九三〇 振替東京一四六二二

印刷所・長塚印刷 製本所・東京美術紙工

コード番号 3091—3212—1475

乱丁・落丁本はお取替え致します

# 高橋和巳研究

小川和佑編



教育出版  
センター



高橋和巳研究  
目次

|    |             |      |   |
|----|-------------|------|---|
| 序章 | 詩的散文二篇…………… | 高橋和巳 | 7 |
|----|-------------|------|---|

## 総論

|                |      |    |
|----------------|------|----|
| 高橋和巳とその時代…………… | 小川和佑 | 17 |
|----------------|------|----|

共同幻想としての戦後民主主義／高橋和巳とその時代／戦後意識の原点／述志の文学／反世界の視覚

|            |      |    |
|------------|------|----|
| 高橋和巳論…………… | 中山和子 | 40 |
|------------|------|----|

## 高橋和巳と第三の新人

―戦後文学における世代の相克をめぐる―……………石阪幹将 58

文学的開眼時代／憂鬱なる世代観念／文学における

世代の相克

## 作品論

|                         |      |    |
|-------------------------|------|----|
| 知識人告発の文学―『悲の器』について…………… | 河野仁昭 | 79 |
|-------------------------|------|----|

|             |      |    |
|-------------|------|----|
| 憂鬱なる党派…………… | 小林広一 | 94 |
|-------------|------|----|

|                       |      |     |
|-----------------------|------|-----|
| 「散華」論―刺客的行為の視点から…………… | 宮本一宏 | 108 |
|-----------------------|------|-----|

|                         |       |     |
|-------------------------|-------|-----|
| へ世なおしへの幻想虚構―『邪宗門』論…………… | 高市順一郎 | 123 |
|-------------------------|-------|-----|

相依の文学―「文学の責任」と「暗黒への出発」……………小川 武敏 151

黄昏の橋―救済なき知識人の運命……………小林 隆 166

## 高橋和巳文学入門

人と作品……………中山 緑朗 183

作品への招待（初出・初収文献／梗概／鑑賞・評価）

日本の悪霊 暗殺の哲学 捨子物語 新しき長城

我が心は石にあらず 墮落 詩人の運命 中国文学

論集 白く塗りたる墓 人間にとって わが解体

もう一つの絆

## 書誌研究

高橋和巳研究への指標……………小川 和佑 219

研究文献目録……………石本 太郎 225

高橋和巳年譜……………石本 太郎 243





# 序 章



月 光

高 橋 和 巳

淡い蠟燭の灯に輝し出されて、集つてゐる男達の表情は皆、疲れて灰色に黯んで見えた。無氣力にたるんだ頬には脂汗が浮び、瞳は申し合せた様に（諦念）の色を帯びて濁つてゐた。蠟燭の焰は、絶え間なく身をよじり、蒼白い煙が螺旋を画いて虚空に散つた。もう、戦争の恐怖や、生そのものの様な屈辱は数時間の間に語り尽されて終つてゐた。今は、放心と退屈が男達の内部に、そして部屋全体に渦巻くばかりだつた。

「矢張り、我々は仏教を研究する必要がある。」

机に背を凭せてゐた、肉付の屈強な長髪の男が言つた。声は哽れてゐて、それが彼の言葉を真実らしくした。彼の髪は、後頭部に若白髪が混つてゐて、それが微動する光線の為か怪しくきら／＼と光つた。男はそれだけ言ふと、仲間の期待を裏切つてそれつきり黙り込んで了つた。皆は各自、煙草をくゆらせた、上半身をゆらゆら動揺させたり、天井を意味あり氣に眺めたりしてゐた。

閉ざされた部屋の中には沈黙が支配した。話題の涸渇は、戦禍の回想や予想以上に耐え難かつた。時間は無言の裡に、ちりぢり過ぎて行つた。晩秋の夜の冷気が、部厚い面紗の窓帳を透じて忍び込み、漂光に浮出てゐる貧しい部屋の唯一の裝飾、――灰色の壁に掛つた小型の静物画を震はせてゐた。男達には最早何も云ふ事がなかつた。響宴がこれ以上長びけば、形而上学も、あの〈孤独〉と〈憂鬱〉と、娼婦の話しに墮すに決つてゐた。集会が、燦爛となる為には、矢張酒精が必要なのかも知れなかつた。

「この薄つぺらな天井では、首を縊れないの。」

強度の近眼鏡をかけた別の一人が呟いた。

「貴様の様なつぽは足が下について駄目だ。」

一人が睡そうに応酬する。

「ところで貴様は何の為に生きとるのか？」

この部屋の主が、横の〈枯木〉と渾名されてゐる優男の方に開きなほつた。

「俺の知つた事か、本能に聞いてくれ。」

「自分はどうなんだ。」

尋ねかえされた方は、顔を強直させて薄笑した。彼の得意の〈人〉にやり〈人〉は影もなかつた。

再び静謐があたりに君臨した。高台になつてゐるこの附近では、何時も夕刻から夜更にかけて蟲々の鳴声が聞かされた。しかし、其時は不思議に物音一つしなかつた。饗宴は中だるみのまゝ、停退し、漂ふのは唯沈鬱な人間の吐息と男達の体臭ばかりだつた。

「あゝ、雨が降つて来たな……」

不意に窓辺に坐つた男が感歎した。帰らなければならぬ——男の歎声に皆は目を見合せて項付き合つた。「どしや降りになるといかんぞ。」窓辺の男は奇妙な微笑を浮べて、重いカーテンをさつと引つばつた。外は雨ではなかつた。帳をのけられた硝子窓から、白い冷い月光が部屋一ぱいに流れ込んだ褐色だつた男達の顔はすーと蒼白く澄み、坐つてゐる影が畳と反対側の壁に映つた。

外は、月が晃々と輝き、家々の薨は濡れた様に見える、樹々の梢は微風を孕んで揺れてゐた。男達は門の前で二組に別れ、帰途についた。傾斜になつた小砂礫道の途中で、誰かが呼ぶ様な声がして、一組の男達は一斉に背後を振り返つた。高台の上では、月光に輝し出された樹々が、笑ひ声の様な音を立て、ざわめき揺れてゐた。

〔一九五一年十二月発行「土曜の会」1号初出〕

## 淋しい男

高橋 和巳

隣家に、混血種の褐色の小犬がゐて、何時も葦笛の様な鳴声をたてた。朝、男がかばんを脇に抱え、肩で呼吸をしながら、項垂れて出て行くと、格子戸に繋がれた小犬は、病弱の男を無表情に見上げOn, On……と鳴いた。男も無表情を装つて、「お早う」と挨拶した。

挨拶がすむと男は、顔を顰め眉を寄せて、歩んで行つた。両側に列んでゐる借家の表障子の硝子に男の変<sup>ゑ</sup>贏した姿が映つては消えた。彼は時々独語を呟き、痰を塵箱に吐き捨てた。会社は憂うつであり、物を言ふ氣もしなかつた。男の同僚達にとつては、彼は又この上なく憂うつな存在であり、事務室の悪臭の根源の様に思えた。時折、おい、そのこの帳面……と彼の前の同僚は云ふ。彼は手を伸ばして、それを手渡した。

夕刻男が瞳を青く濁らせて帰つて来ると、小犬は又、On, Onと吠えた。

或時、彼は泥酔し、胸の動悸と頭痛に悩まされながら、ふら／＼帰つて来た。

男は隣家の門前迄来ると、不図立止り大きく体を左右に揺り何か呟いた。小犬は尾を股の間に巻いて尻ごみした。それを見ると男は急にカバンを道路に投げ出し、四匍ひになつた、首をつき出しOn、Onと吼えた、側の共同水道の側にいた女達は、男の酒乱の醜体をひそかに嘲笑ひ合つた。

しかし、夜は小々うるさかつた。男の読書は畜生の操声に何度か中断された。慣れていても耳につき出すと苛々して、眠る事さえ出来なかつた。男はその裏切り者を繰返してのろい、人盗坊よけにもならぬ無能者は死んで終えVとつぶやいた。

ある冬の夜、男は都会の騒音が窓辺から遠のいてから、非常な虚脱感を覚えた。その脱落の感覚は学生時代からのものだつたから決して珍らしい事ではなかつた。しかし、男はそれを小犬の葦笛の音が何故か缺けてゐる事のせいにした。

そう云へば、今日帰つて来た時はひどく元気がなかつた。

妄想狂の彼は、小犬が、自動車に轢かれる状況を想像した。すると、もう死が敵然たる事実と思えるのだつた。「まあ、これも運命だ」彼は妄想で殆ど自責の念をさえ覚えた。その翌朝、彼は寝不足の目を瞬きながら隣家の門の前を通り過ぎた。小犬は本当に死んだのだつた。生垣の横にもう墳が出来てゐて小

石が山にして堆んであつた。彼はそれに一べつを与へ、四<sup>あたり</sup>辺の黝んだ家並み、塵箱と電柱しか見当らぬ裏街を歩いて行つた。大分行つてから「お早よう」と彼は云つた。まだ二十歳を過したばかりの彼の背姿は衰残の老翁の様に骨張つてゐた。

〔一九五一年十二月発行「土曜の会」2号初出〕



# 總 論